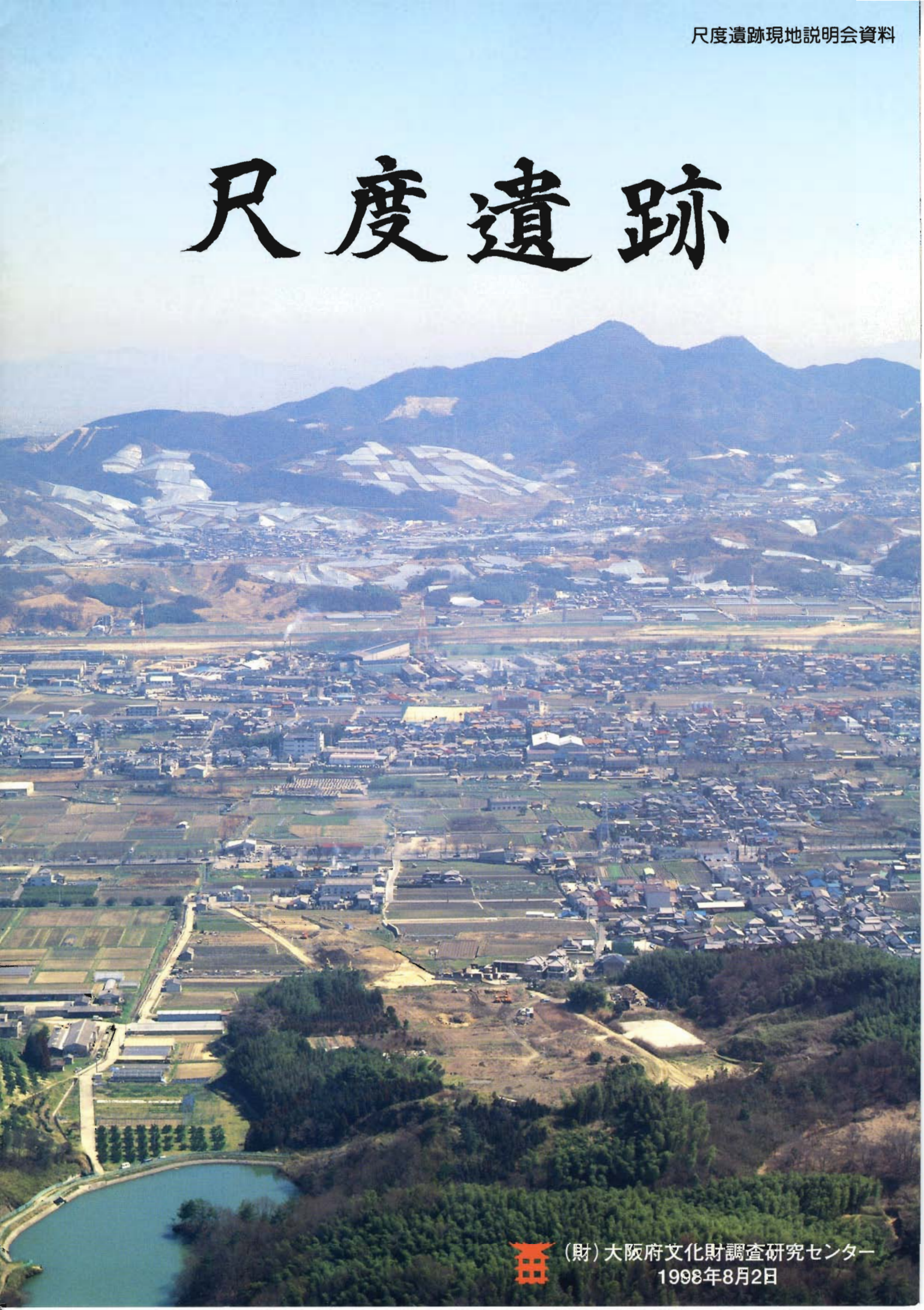
尺度遺跡現地説明会資料

尺度遺跡



(財)大阪府文化財調査研究センター
1998年8月2日

尺度遺跡の発掘調査

尺度遺跡は大阪府の東南部、羽曳野市の尺度にあります。今回は南阪奈道路の建設工事に先だって発掘調査しました。

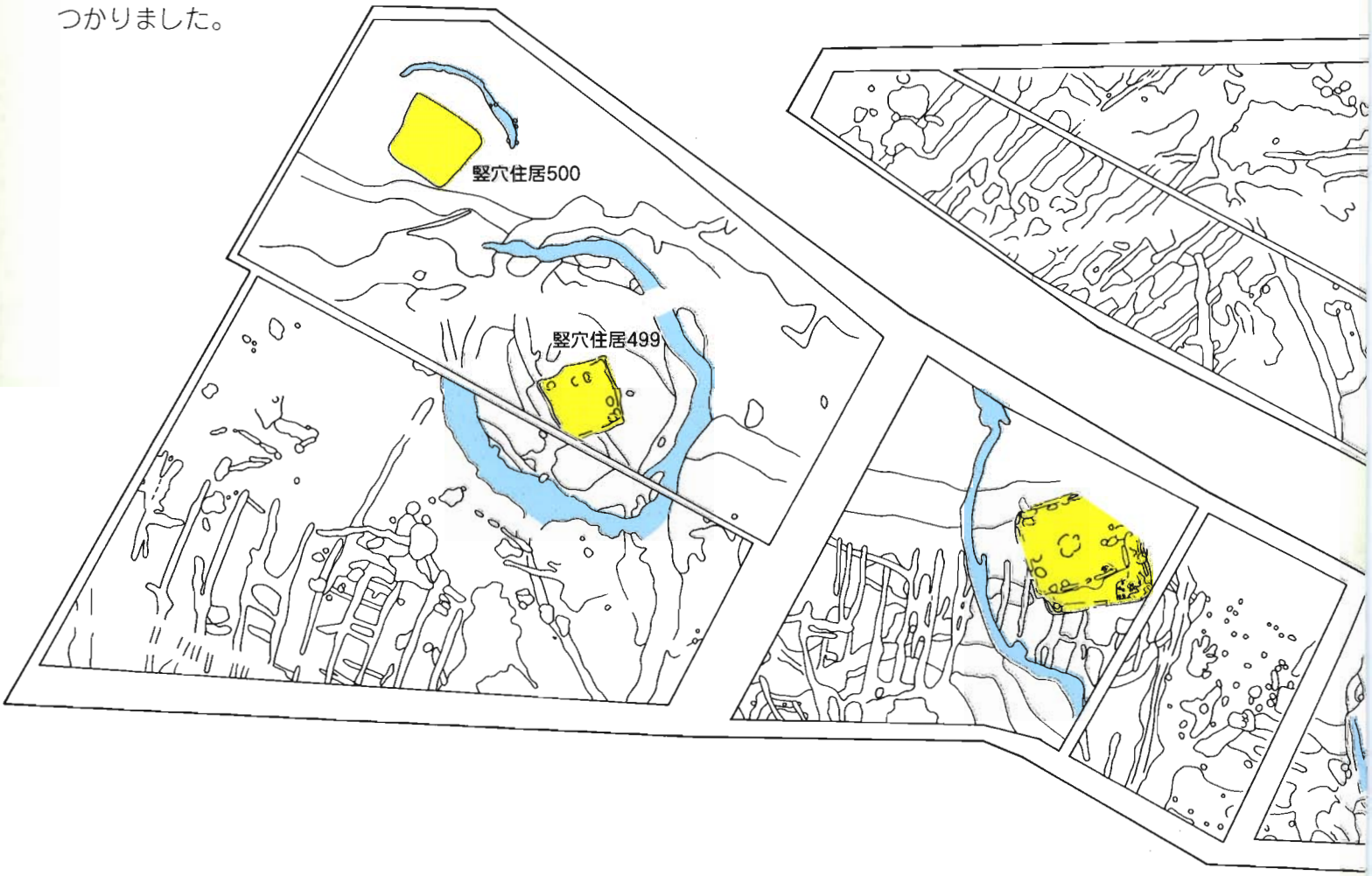
昨年度の調査では、西側の羽曳野丘陵の斜面から旧石器が出土したのをはじめ、丘陵の裾の辺りでは弥生時代から古墳時代ごろの何本かの川の跡や、古墳時代後期や平安時代の溝などを発見しました。また、外環状線よりも少し西の辺りで古墳時代のはじめ頃のムラを発見しました。

今回は、古墳時代のはじめ頃のムラの中を発掘調査しました。そこから竪穴住居や井戸・溝などがたくさん見つかりました。

古墳時代はじめ頃のムラ(1700年前ごろ)

今回の調査でわかった古墳時代のはじめ頃のムラの跡です。下の写真の小さな正方形に見えるのが竪穴住居という家の跡です。このころの竪穴住居は四角い形をしており、地面を掘り下げて柱を立て、そこに直接屋根をのせたような家です。まんなかに炉（いろりのようなもの）や、四本の柱穴の跡がありました。また、家の周りには排水のためか、ぐるりと溝を巡らせています。

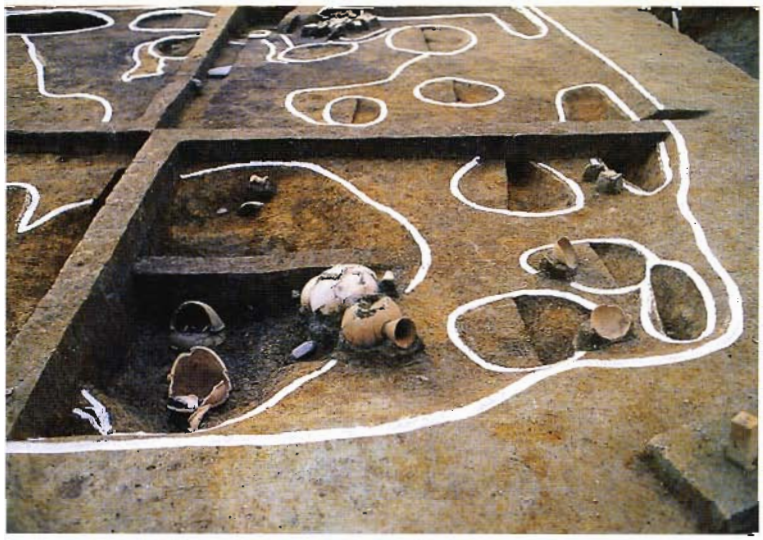
さらに、ムラの中には直角に曲がる溝があり、四角い区画があったと考えられます。これはなにか特別な場所を囲む溝であったと思われます。



土器をいれた穴のある家

この家は床に大きな穴があり、その中に手焙形土器が２つ、ほとんど割れずに置かれていました。この土器を入れるために穴を掘ったと思われます。

穴は、家で生活するのにはたいへん大きいので、家を出ていく時に床に穴を掘り、土器を入れて「おまつり」をしたなごりかもしれません。

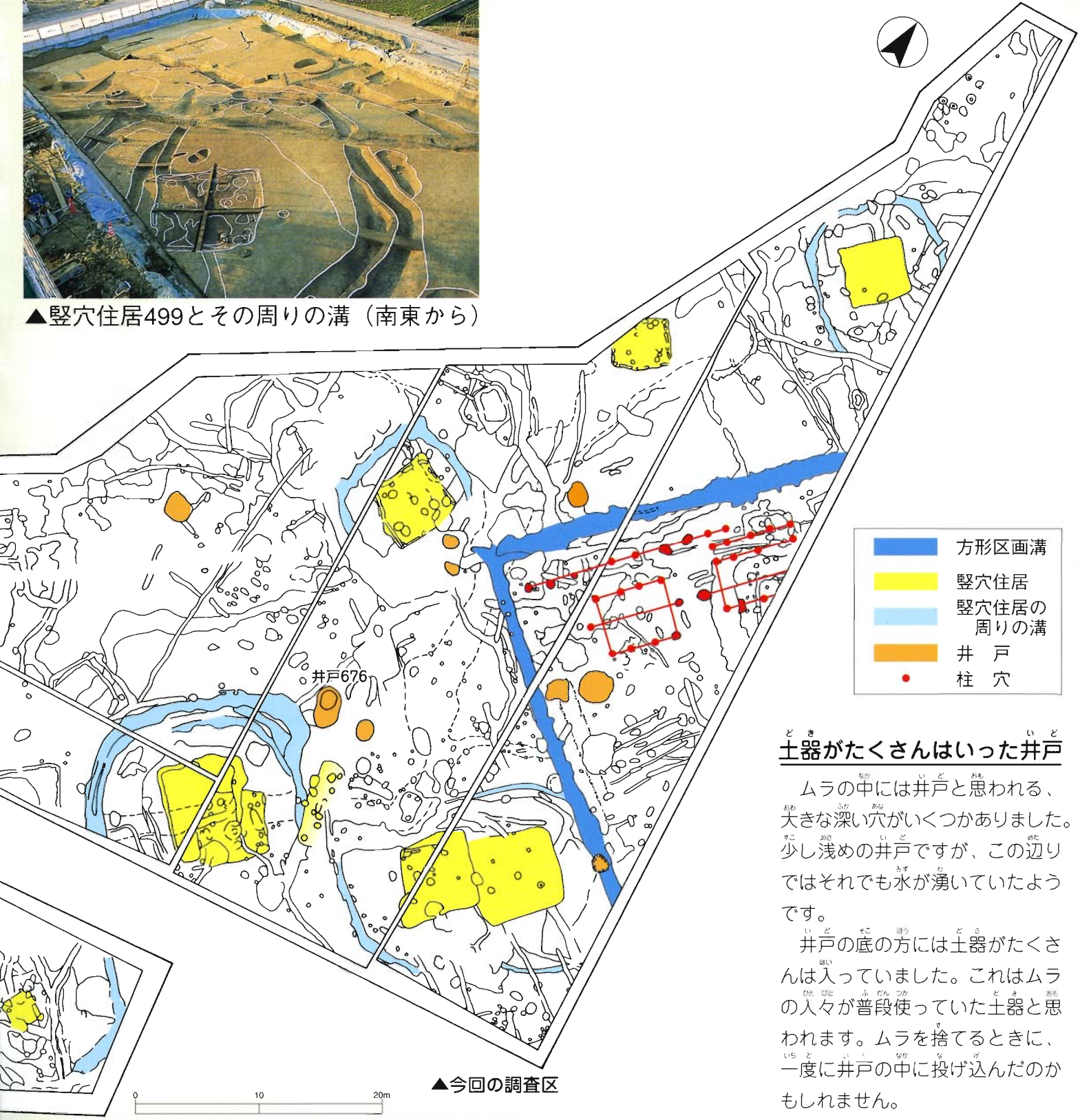


▲竪穴住居499の土器（南東から）

カマドのある家

カマドとは、煮炊きをするためのものです。家の壁際に「コ」の字形をした土壁が残っていました。元々は手前に火をたく口があり、その上に鍋をかける穴のある形をしていたと思われます。

▲竪穴住居499とその周りの溝（南東から）

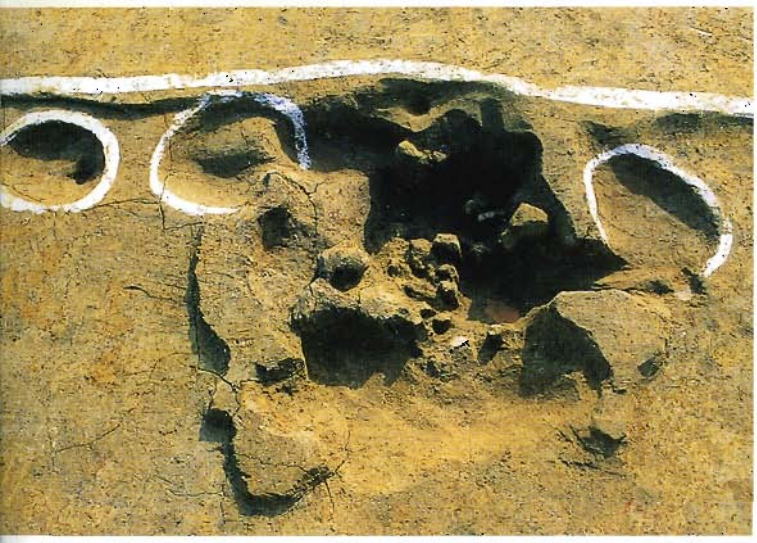


▲今回の調査区

土器がたくさんはいった井戸

ムラの中には井戸と思われる、大きな深い穴がいくつかありました。少し浅めの井戸ですが、この辺りではそれでも水が湧いていたようです。

井戸の底の方には土器がたくさんは入っていました。これはムラの人々が普段使っていた土器と思われます。ムラを捨てるときに、一度に井戸の中に投げ込んだのかもしれません。



▲竪穴住居500のカマド（北から）

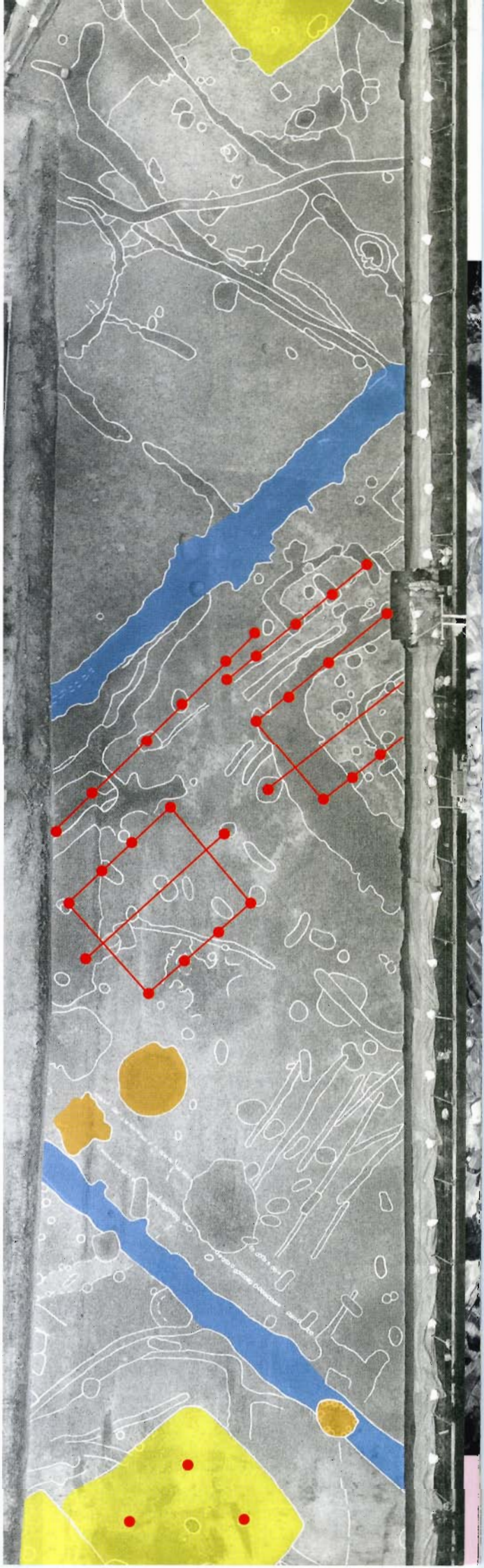
▲井戸676の土器（東から）

今回の発掘調査

▲ムラの中を四角に区画する溝（南西から）

▲四角に区画する溝と杭列・井戸（北西から）

▲2つの竪穴住居（北西から）



出土した遺物

尺度遺跡では竪穴住居や井戸、溝などから土器がまとまって出土しています。

この中には弥生時代後期の土器とともに、「庄内式土器」と呼ばれる、古墳時代のはじめ頃の土器が出土しています。この土器はたいへん薄く作られており、煮炊きをするには熱が伝わりやすく、とてもふさわしいものです。

土器にはいくつかの種類があります。煮炊きに使う甕や、ものを蓄えるための壷、食べ物を盛る高坏などがあります。さらに手焙形土器といって「おまつり」に使われた土器もあります。

また、出土した土器のなかには大和地域の土器に似たものもあります。このことは、このムラに住んでいた人々が、他の地域の人々と交流があったことを示しています。

▲煮炊きに使う土器（甕）

▲拡大写真

▲竪穴住居499から出土した土器

▲井戸676から出土した土器

まとめ

今回の発掘調査では、南河内地域で初めて、古墳時代のはじめ頃のムラを発見しました。人々が家を建てて住み、近くの井戸から水を汲んで生活をしていた、そんな光景が思い浮かびます。

さらに、ムラの中を四角に区画する溝を発見しました。この溝で区画された場所はムラの中でも特別な場所であったと思われます。その中には、周辺の地域にも影響を及ぼしたような有力な人が生活をしていたのかもしれません。

今回、古墳時代のはじめ頃のムラの全体が分かり、そのころのムラや社会を考える上で重要な発掘調査となりました。

尺度遺跡 尺度遺跡現地説明会資料
発行 (財)大阪府文化財調査研究センター
〒536-0016 大阪市城東区蒲生2-11-3 小森ビル4階 TEL(06)934-6651
発行日 1998年8月2日
印 刷 石川特殊特急製本㈱